

博士論文の概要および審査の結果の要旨

| | |
|---------|--|
| 氏名(本籍) | 李 杏 九(大韓民国) |
| 学位の種類 | 博士(文学) |
| 学位記番号 | 乙 第29号 |
| 学位授与の日付 | 平成10年2月13日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第6条該当者 |
| 学位論文題目 | 華嚴經思想研究 |
| 論文審査委員 | 主査 香 川 孝 雄 副査 高 橋 弘 次 副査 水 谷 幸 正 |

一、論文の概要

この博士請求論文は、『大方廣佛華嚴經』の思想を体系的に論述せんとするものである。

そのために次のような構成より成り立っている。

総 序

第I章 法身佛思想

第II章 菩薩思想

第III章 唯心思想

第IV章 縁起思想

第V章 浄土思想

総 結

先ず総序において、本論文の方法論とその意図について述べる。すなわち、従来の華嚴研究の多くは、智儼、法蔵、澄観などのいわゆる華嚴教家達の註釈を通して研究されてきたが、ここでは、それらを「従」とし、それよりも『華嚴經』そのものに直参して、經典の思想を明らかにしようとする。その場合、『華嚴經』に諸本ある中、古来より最も多く依用されている佛陀跋陀羅訳の六十卷本を基本とし、必要に応じて八十卷本、四十卷本を参考とする、と述べる。

第I章においては、最初に初期仏教以来の法身佛思想の展開を概観した後、『華嚴經』における法身佛思想の特色を検討する。本經では、法身佛として毘盧舍那佛が説かれているが、そこで論者は、これを衆生態法身と光明態法身の二種の意義を見出している。すなわち衆生態法身とは、如来の智慧のみを具えた法身であり、光明態法身とは、如来の智慧と慈悲とを具えた法身であるという。

第Ⅱ章では、中国の華嚴教学では、菩薩の修行階位として、十信・十住・十行・十廻向・十地・等覺・妙覺の五十二位が設けられているが、『華嚴經』自体としては、必ずしもそうではない。最初の十信の一つについて經典には説かれていない。唯、「普賢菩薩品」に信について説かれている。信は佛道修行の第一歩であり、それは、三宝に対する信と、一切衆生が本来仏であることを信ずる信の両面のあることを指摘する。また、等覺や妙覺も經典には説かれていない。十住から十地に至る菩薩の実踐行は、十波羅蜜に要約することが出来ると結論する。

第Ⅲ章の唯心思想では、「十地品」に説かれている「三界虚妄 但是心作 十二縁分 是皆依心」と「夜摩宮中偈讚品」における「一切唯心造」の句を取り上げ、(1)そこに説かれる心とは、自性清浄心であるのか、虚妄分別心であるのか、(2)作、依、造などの語は、いかなる意味に用いられているのか、(3)一切にはいかなるものが含まれているのか、などの問題を提起している。

(1)については、『華嚴經』においては、心は、欲心または貪心として説明されている。若しも絶対不変な清浄心によっていっさいが作られるとするならば、一神教と何ら異なるところはないからである。

(2)は、經典では、心が一切を創造するのではなくて、心の作用または心の持ちかたと云う意味に用いられている。

(3)の一切については、縁起せる一切萬有、すなわち法(dharma)を意味する。

以上の考察から、あらゆる存在や現象は、絶えず生滅変化する貪欲な衆生心によって作り出されたものであるから、無常にして実体のないものであると説くのが『華嚴經』の唯心思想であると結論する。

第Ⅳ章の縁起思想では、經典に説く縁起を三つに分類して考察している。

A群 一般仏教の教学上からいう縁起、因縁の意味として。

B群 十二縁起に関するもの。

C群 法界縁起に関するもの。

この中で『華嚴經』特有の縁起説は、C群のそれであるが、經典には法界縁起なる語は出てこない。それは、後代の華嚴家たちによって名付けられた名であるが、しかしその源流は『華嚴經』の中にある。論者は、これを三つの範疇に分類して説明している。

(1)は空間的な相即相入の縁起句で、縁起の諸法が空間的に圓融無礙に相即相入する相をあらわす縁句をいい、例えば「一即一切、一切即一」のような論理である。

(2)は時間的な相即相入の縁起句で、縁起の諸法が時間的に重重無尽に相即相入する相をあらわす縁句をいい、例えば「無量遠劫即一念」とか「三世即一念」のような論理である。

(3)は主伴具足の縁起句と名づけ、法界縁起論では、あらゆるものは相即相入していると見るから一を主にすると余はすべて伴となる。諸法はすべて主となり伴となる。このような論理から「衆生即佛」とか「初発心菩薩即是佛」と云われるのであると言う。

第V章 浄土思想においては、『華嚴經』に説く蓮華藏世界と『無量寿經』などに説く極楽世界とを比較している。まず佛身義については、『華嚴經』の毘盧舍那佛を「光明遍照」とし、阿弥陀仏を「無量光」とし、また、久遠劫の昔より無量の大願と菩薩行によって成仏したという点では、両者異なるものではない。浄土義については、両者共、願力所成という点でも同じであるが、蓮華藏浄土は十方であり、極楽世界はただ西方であるところに違いがある。念仏義については、『華嚴經』の場合は、止観念仏であるが、弥陀浄土信仰にあつては、称名念仏が主であるところに異なりがあると指摘する。

総結において、以上の論述を簡略にまとめて、この論文を終わっている。

二、論文審査結果の要旨

論者は総序において述べるように、従来の註釈書によって華嚴教学を研究するという方法を「従」とし、直接に六十巻にも及ぶ大部な『華嚴經』を綿密に検討した努力には高く評価すべきものがある。かつ他の仏教の流れと比較して『華嚴經』の仏教思想史上における位置を見定め、その特色を把握せんとする狙いは、その方面の研究が少ないだけに斬新性があると思われる。しかし、『華嚴經』の成立に至るまでの仏教思想史の流れを述べる場合に厳密性に欠けることのあるのは、否定出来ない。

以下、注意すべきいくつかの点について論評を加えよう。

第I章：『華嚴經』で毘盧舍那佛として登場する法身仏を衆生態法身と光明態法身との語をもって解明したことは、論者の新しい解釈である。しかし、六十巻本の『華嚴經』ではその解釈が成り立つとしても、異訳の『如来興顕經』においては、その解釈が当てはまるとは必ずしも言えない。このことは、より広く『華嚴經』思想の展開をも考慮に入れる必要性を痛感せしめる。

第II章：前章は言わば「仏とは何か」を問うたのに対し、この章は「仏になるためにはどうすればよいか」を主題とする。普通一般に菩薩の修行階位として五十二位が数えられるが、『華嚴經』自体には、そのすべてが説かれているわけではない、ということは前述の通りである。しかし、これら多くの修行階位の内容は、結局十波羅蜜に集約出来ると見るのは論者の卓見である。そしてそのための前提条件として信・発菩提心・願・無瞋恚が提示されているということにも示唆するところがある。欲を言うならば、このような菩薩の修行階位は、例えば『大品般若經』や『マハーヴェストゥ』にも説かれているから、それらとも比較して『華嚴經』の特色を明らかにすべきではなかったか、と思われる。

第III章：仏教の唯心思想は、『華嚴經』に始まったわけではなく、すでに原始經典にも見えているが、本經の唯心思想の特色は、十二縁起説と結び付けたところにあり、先に出した唯心句の心が、清浄心ではなくて、貪欲の心であると指摘しているところは、妥当な結論である。ところで世親になると、この心を「一心」と訳し、心に世俗諦と第一義諦とがあつて、世俗諦

は一心が雑染と和合して縁起したものであり、第一義諦は一心そのものであって、阿梨耶識であるとし理解されるようになった、と後の唯識思想、如来蔵思想への展開にまで及んでいる。このことは、仏教思想史を考える上で重要なことである。

第IV章：縁起の思想は、『華嚴経』では最重要課題であり、また論者も最も力を注いだところである。論者は經典に出る縁起の思想を、A・B・Cの三群に分け、さらに華嚴教学の特色とするC群の法界縁起を、1)空間的な相即相入の縁起句、2)時間的相即相入の縁起句、3)主伴具足の縁起句に分類して夫々の例文を引用して説明している。このような解釈は、筆者の創見であり、難解な法界縁起の思想を分かりやすく理解することが出来る。

第V章：ここでは、華嚴教学で説かれる毘盧舍那佛・蓮華蔵世界と浄土教の阿弥陀仏・極楽世界を比較している。論者は毘盧舍那佛も阿弥陀仏も共に光明遍照であり、無量の過去に覚った永遠不滅の仏であるから同じであるといい、浄土についても共に願力所成であるから似ているが、蓮華蔵世界は十方に遍満するのに対して、極楽世界は西方であると説くところに違いがあるという。このことは、後の教学においても論議されるところであって、単に經典の文字だけで結論を出すのは早計であろう。また、念仏について『華嚴経』は止観の念仏を説くのに対して、浄土教は称名念仏が主であると述べているが、浄土教で称名が強調されたのは、中国の善導を始めとする流れであって、浄土經典自体には、そのような傾向は見られない。

全体的にみて、本論文は、『華嚴経』の思想を法身、菩薩道、唯心、縁起、浄土の各章に分けて祖述したものと感強い。『華嚴経』のような大經典は、一時になったのではなくて、夫々独立した經典が、A. D. 四世紀頃に集められたものと言われているから、古いもの、新しいものが混在しているにも拘らず、それらを区別せずに論じているが、やはり成立については顧慮すべきである。また思想面でもこれだけでは十分でない。『華嚴経』の特異とする思想は、以上の外に、例えば「如来性起」の思想があり、実践面では、「普賢行願」があり、いずれも一章を設けてもよい程の重要な事柄であるから、今後の課題としてさらなる研鑽を期待したい。

細かく言えば、種々の瑕瑾が認められるとは言うものの、『華嚴経』という大部で、しかも深遠な思想をよく理解し、解明した努力は、大いに称賛されるべきである。

よって本論文は博士(文学)の学位に相当すると認められる。

博士論文の概要および審査の結果の要旨

| | |
|---------|---|
| 氏名 (本籍) | 朴 相 俊 (韓国) |
| 学位の種類 | 博士 (文学) |
| 学位記番号 | 甲 第8号 |
| 学位授与の日付 | 平成10年3月14日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条該当者 |
| 学位論文題目 | 韓国の死生観研究 —新羅・高麗を中心に— |
| 論文審査委員 | 主査 池 見 澄 隆 副査 水 谷 幸 正 副査 西 村 恵 信 (花園大学) |

1. 論文の概要

本論文の目的は、韓半島民族の古代・中世にわたる死生観の研究である。方法・立場としては、その死生観が形成されるうえで仏教(浄土教および禅)が、どのようにかかわったかについての、精神史的研究である(なお、学術的には標題を「朝鮮」とすべきであるが、論者の母国〈韓国〉の政治的事情により、あえて韓国とし、そのため、副題には新羅・高麗という国名をも表わす時代区分を用いている)。全体は2篇から成る。

第1篇第1章は、古代三国の死生観である。資料として現存最古の朝鮮の私撰史書である普覚一然編『三国遺事』を用い、民衆から高僧に至る古代人の場合をとりあげている。

まず第1節は古朝鮮の建国王、檀君をめぐる檀君神話の解明である。従来は、檀君の誕生の象徴的意味を「弘益人間」とされてきたが、論者は弘益の対象が人間に限定されていないことを根拠に、「弘益生命」と把えるべきことを提唱している。また檀君の寿命が人の寿命をはるかに超える「千寿」であることをふまえて、そこに檀君をとおしてみた古代人の死生観の特質を「死の受容」と把えて論じている。

第2節では、新羅の初期仏教の伝播史上、決定的な役割を果たした異次頓(527寂)についての解明である。従来、異次頓については宗教学・文学の立場から研究されてきたが、論者は精神史の立場を強調したうえで「白乳湧出」(斬られた首から白乳が湧出したこと)の記述のなかに、仏教の受容と興起という社会的役割の功績をみようとする。また、「白乳湧出」とおして自分の生命を捨てて生きようとする「捨の精神」に、かれの死生観の特質を見出そうとしている。

第3節では新羅人の死生観のうち、資料のなかで自分の死を叙している個所と他人の死を叙している個所とを対比し、前者については（国王と官僚と僧侶の場合）、死後も新羅の国益を希求し護国神となったことを論じ、後者については、当人の意思と関係なく、往生浄土を願っていることを述べている。また輪廻観については仏教の六道輪廻観と、新羅古来の輪廻転生観を対比的に論じ、輪廻の範囲と主体について考察を加えている。

第4節は高僧元暁（617-686）の死生観である。ここでは死生観を、精神の根底あるいは枠組みとして捉え、従来、和諍精神と無礙精神とに分けて論じられてきたのに対し論者は、後者をこそ元暁の死生観ないし精神の本質であると論じている。

第2章は『三国遺事』のなかでも編者、一然の手になる「讚」にみられる死生観である。ここでは古代人の精神と、「讚」にみる中世の普覚一然の精神とが重層性をなしていることを論じている。その二重の精神を真郷・隠避・来世・如夢・自解に分け、古代人の浄土教的側面と中世の一然の禪的側面が相即している点を指摘している。

第2篇第1章では中世人の死生観を論じている。禅仏教が盛んになった高麗時代に、その禅文化の形成に大きな役割を果たした次の6名をとりあげる。普照知訥（1158-1210）、真覚慧謙（1178-1234）、普覚一然、白雲景閑（1299-1375）、太古普愚（1301-1382）、懶翁慧勤（1320-1376）の諸師である。資料は禅僧の『語録』である。

従来の研究では禅の解明を試みる場合、その禅思想、禅僧の法脈、社会活動の諸型があるが、このうち禅思想については、その根幹である死生観の解明がなされなかったことに鑑み、論者は死生観から禅思想への展開を中心に論じている。

第1節は高麗禅仏教中興の役割を果たした普照の場合である。ここではかれの「見性観」を中心に論じている。その晩年については従来「頓悟漸修」説を斥け「頓悟頓修」説を提唱している。

第2節では、普覚一然の場合を（さきの『三国遺事』讚ではなく）かれの臨終法語をふまえて、怪異と舍利をめぐる臨終観について論じている。

第3節は中国の臨済系統の正法を師資相承した普愚の場合である。その死生観の特質を、自性究明と利他教化、および嗣法伝授と正法伝授について検討し、とくに話頭（公案）参究の手段や実践的な修行体験における修行の方向提示に見出そうとしている。

第4節は、真覚・普覚・白雲・懶翁の4名の場合の比較である。ここでは、〈無心〉をキーワードとしてそれぞれの特質を論じている。総じて中世禅僧の場合、その思想全体のなかで、死生克服が究極課題であることをあらためて強調した。以上を次のように要約できる。新羅時代では民衆の死生観が、「往生と現世利益」の双方向をその特質とし、対するに元暁の場合は「現世における悟りと無礙の教化」がその特質であった。また高麗時代の禅僧の場合は「廊徹大悟と死生解決」がその特質であった。

2. 審査結果の要旨

本論文の論者は、修士論文において、死生観をめぐる日・韓の比較研究を試み、この段階で、仏教教理から日常の心性に至る死・生をめぐる精神の把え方を身につけた。今般の論文は、その学的蓄積を活かして、母国(韓国)に対象をしぼり、死生観の特質と展開を究明した。従来の研究では、主に仏教学や文学の立場から、個々の高僧の死生観を断片的、散発的に論ずるか、あるいは仏教思想そのものの解明のなかで、わずかに死生観にも言及するという例が圧倒的多数を占めていた。そのような研究状況のなかで、本論文は、社会的には僧・俗あるいは民衆と高僧を含む幅ひろい層について、時代的には古代(三国)から中世(高麗)をつうじて解明するという、まことにスケールの大きなものであり、しかも精神史という立場・方法を自覚した研究である。その意味で、これはこの分野におけるこの種の最初の本格的な研究であると位置づけることができその点を高く評価できる。ちなみに死生観の意義を最大限に解釈し、民族や個人の精神の根幹とみなす視点は、精神史研究として首肯できる。また従来の学説に対して再考や修正を迫る独創的見解が諸処にうかがえることは、その挑戦的意欲と共に注目に値する。

さらに、第2篇の禅者の死生観ないし精神に関する論究では、論者自身の禅にかかわる修行の実体験にもとづく語録の読解に、独自の主張がみられる。これは禅研究をめぐる客観的な立場と主体的な立場との是非如何といった根本的な問題を結果として提起するに至っている。思うにこれは、韓国と日本の禅僧の体験的世界の差と、近代的文献学をめぐる習熟度の差とに由来するものであろう。日本の禅者は、体験を重んじながらも極力、客観的な分析や記述を心がけるのに対し、この論者は、大胆に体験から得たところの〈智〉をもって中世の禅の世界を解明しようとする。ところでこの場合、研究主体の研究対象への追体験という問題も介在してこよう。精神史研究としてむしろ要請される追体験の範囲に踏み止まっているとき、その論述は精彩を放つのである。

これに比べて第1篇はより文献に忠実であり客観的態度を保持している。そこで、以下第1篇を中心に、若干の苦言を呈したい。

第1節の檀君神話にみる、人寿を超えた生命(寿命と再生後の在位期間)は、肉体的生命と霊的生命的連続として把えていると理解されるが、その死生観を、死の忌避や超克でなく、死の受容と論じているのはやや説得力が不足である。むしろ、肉体的生命の終焉を受け容れる〈死の受容〉と、霊的生命的希求としての〈死の忌避〉=不死願望との複合とみる方がより妥当ではなかろうか。次に、檀君は古朝鮮に「往生」して弘益生命を実践したと論じているが、この場合の往生が脱「輪廻」としてのそれなのか、はたまた単なる転生でしかないのか、についてより厳密な検討が望まれる。

第2節の異次頓の場合、斬られた首から白乳が湧出したとされる説話については、従来、仏教的「殉教」とみる見解と儒教的「献身」とみる見解のあるなかで、論者は、捨てて生きる、生への完全燃焼であり、利他に向けての全力投球であるとして、これを「捨の精神」と命名し

意義づける。興味ぶかい指摘であるが、そこに論者自身の死生観が投影しているのではないかと疑わせるものを払拭しがたい。資料に即して虚心にみるならば、殉教や献身の他にあって捨の精神なるものを明確に見出すことに困難を覚えるのである。少なくとも殉教説や献身説を斥けるのでなく、両者を統合した上でさらに踏み込んで論ずる方途がより妥当ではなからうか。

第3節の新羅人の死生観では、「自分の死」と「他人の死」との内容上の明らかなちがいをめぐって論じているが、その理由・意味・背景について考察を掘り下げることが望まれる。

次に輪廻の範囲と主体について、新羅古来の輪廻観を、仏教的輪廻観との対比のなかで論じているのは注目すべき論点である。ただし、新羅古来の輪廻観の特質として、輪廻の主体に「病」をも挙げているのは如何であろうか。思うにこれは、病の原因が、細菌やウイルスなど生き物であるとする現代医学の知見をもって（注にその証あり）資料を読解した結果の誤謬であろう。すなわち病そのものを生命体であると新羅人が理解していたのではなく、竜に象徴される輪廻の主体が「病害」をもたらすという意味であると解すべきである。

しかしながら以上のような難点は、本論文全体の価値を決定的に貶めるものでは断じてなく、草分けの研究にありがちな瑕瑾である。むしろ論者の力量と意欲は、近い将来、これらの諸点をクリアするばかりでなく、方法論のさらなる熟成をまって、その研究が大きく開花を遂げるであろうことを確信し期待する。よって本論文は博士（文学）の学位に相当するものと認めるものである。